

西東南も北も天地も

荷なふて立てるかみの御柱

この柱今は隠れて見えざれば

世の大方は知るものもなし

このまゝと二名と九名の草枕漸く四巻の校正終る

第九編宇宙真相研究し神示の世界を悟るに至る

昭和一〇、一一、二二、松尾賢市 杉本中博 郎

第九篇 宇宙真相

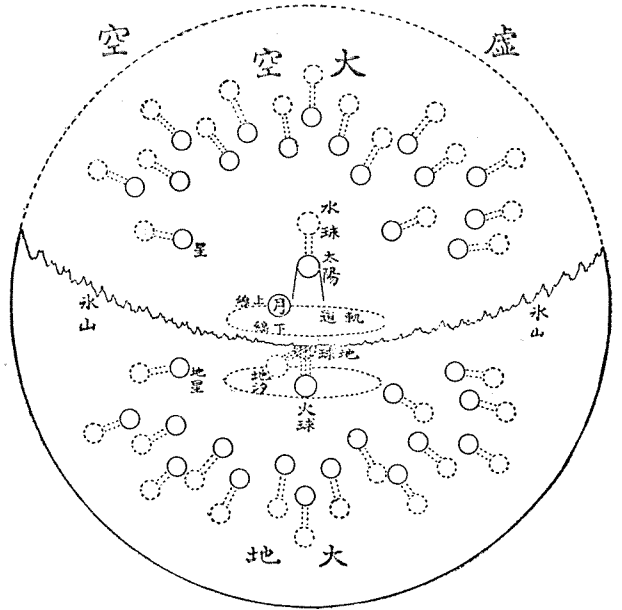
校正本には靈界物語第四巻の「神示の宇宙」の挿絵図が削除されているために、理解されにくい向きもあると思われるので、ここに、著者出口王仁三郎聖師の御校正（肉筆）の原本を全文複製掲載することにしました。

神示の宇宙は科学者の天文学・地文学ではなくて、創造神の眼で見られた宇宙観です。これには幾多の密意が含まれているだけでなく、靈界物語全八十一巻を一貫した主張であるから、靈界物語を将来研鑽する人たちのために挿絵図だけの補遺とせず原本をそのまま掲載したものです。

学者のいう宇宙は物質のかたまりとした見解に立つものであるが、「神示の宇宙」は著者が高熊山に修行の際、宇宙の主神をはじめ天使にみちびかれて見聞された神の立場と神靈世界を基準とされた霊、力、体三元にもとづく宇宙観です。

神示の宇宙観を理解するためには全巻の立場にたつて熟読されれば真神直授の大哲理に到達することが出来るものです。

【圖一第】  
圖斷縱宙宇小



### 第四六章 神示の宇宙「其一」(一九六)

我々の肉眼にて見得るところの天文學者の所謂太陽系天體を小宇宙といふ。

大宇宙には、斯くの如き小宇宙の数は、神示によれば、五十六億七千万宇宙ありといふ。宇宙全體を總稱して大宇宙といふ。

我が小宇宙の高さは、縦に五十六億七千万里あり、横に同じく、五十六億七千万里あり、小宇宙の靈界を修理固成せし神を國常立命といひ、大宇宙を總括する神を大六合常立命といひ、又天之神申主大神と奉祀す。

小宇宙を大空と大地とに二大別す。そして大空の厚さは、二十八億三千五百万里あり、大地の厚さも同じく二十八億三千五百万里ある。

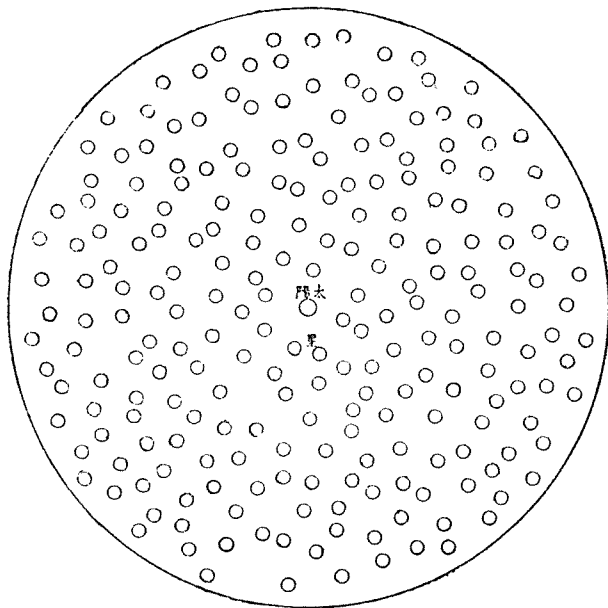
神示の宇宙(其一)

三二七

宇宙真相

三三八

【圖二第】  
圖面平の空大



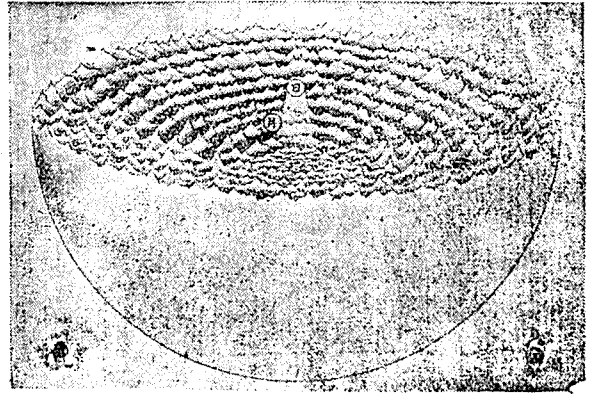
暗星

大空には太陽及び諸星が配置され、大空と大地の間即ち中空には太陰及び北極星北斗星三ツ星等が配置され、大地には地球及び地汐、地星が、大空の星の數と同様に地底の各所に散布され、大空にては之を水火といひ、大地にては之を水火といふ。大空の星は夫れ々各自の光を有し、凡て球竿狀をなし居る。今、圖を以て示せば左の如し。

大空の中心には太陽が結晶し、その大きさは大空の約百五十分の一に當り地球も亦大地の約百五十分の一の容積を有する。そして太陽の背後には太陽と殆ど同形の地球が球竿狀をなし居る。その水球より水氣を適宜に湧出し、元來暗黒なる太陽體を助けて火を發せしめ、現に見る如き光輝を放射せしめ居る。故に太陽

【圖三第】

圖の地大



の光は火の如く赤くならず、白色を帯ぶるは此の水球の水氣に原因するからである。  
太陽は斯くの如くして、小宇宙の大空の中心に安定し、呼吸作用を起しつゝあるものなり。

又、地球（所謂地球は神示によれば圓球ならずして寧ろ地平なれども、今説明の便利のため従来の如く假りに地球と稱しておく）は、四分の三まで水を以て覆はれてあり、水は白色である。この大地は其の中心に地球と殆ど同容積の火球があり、地球に熱を與へ、且つ光輝を發射し、呼吸作用を營んであり、太陽は呼吸作用により吸收放射の活用をなし、自働的傾斜運動を起し、さき太陽の位置は大空の中心にあつて、少しも固定的位置を變ずる事は無い。地球は大地表面の中心にあつて、大地全體と共に自働的傾斜運動を行ひ、その傾斜の

神示の宇宙(其一)

三三九

宇宙真相

三三〇

程度の如何によつて、晝夜をなし春夏秋冬の區別をなすのである。自働的小傾斜は一日に行はれ、自働的大傾斜は四季に行はれる。彼岸の中日には太陽と地球の大傾斜が一樣に揃ふものがある。又六十年目毎にも約三百六十年目毎にも、夫々の大々傾斜が行はれ大地及地球の大變動を來す時は即ち極大傾斜の行はれる時である。  
太陽は東より出で、西に入るが如く見ゆるも、それは地上の吾人より見たる現象にして、神の眼より見る時は、太陽、地球共に少しも位置を變ずることなく、前述の如く、單に自働的傾斜を行き渡るのみである。

天に火星、水星、木星、金星、土星、天王星、海王星その他億兆無数の星体ある如く大地にも亦同様に、同數同形の沙球が配列されてあり、大空の諸星も、大地の諸沙球も、太陽に水球がある如く、地球に火球がある如く、凡て球半狀をなし、さきさき

各それ自体の光を有してゐる。なほ、暗星の數は光星の百倍以上は確かにある。  
太陽は特に大空大地の中心即ち中空に、太陽と同じ容積を有して一定不變の軌道を行し、天地の水氣を調節し、太陽をして酷熱ならしめず、大地をして極寒極暑ならしめざるやう保護の任に當りてゐるものなり。  
太陽の形は圓球をなし、半面は水であり、それ自体の光輝を有し、他の半面は全く火球となつてゐる。今圖を以て示せば次の如くである。（第四圖参照）  
太陽は大空大地の中心を西より東に運行するに伴ひ、地沙をして或は水を地球に送りしめ、或は退かしめたりする。故に満潮干潮の現象を起すのである。神諭に  
『月の大神様は此の世の御先祖様である』

神示の宇宙(其一)

三三一

宇宙真相

三三三  
の言ひ  
示しあるは、月が天空と大地の呼吸作用たる火水を調節するからである。火球は呼吸作用を司り、地汐は吸気作用を司る

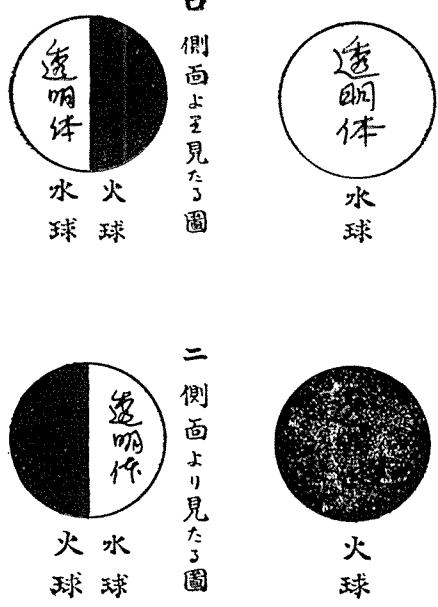
「富士と鳴門の仕組が致してある」

といふ神示は、火球の出口は富士山下、地汐は鳴門を入口として水を地底に注吸し、火球及び地汐より、なほ人体に幾多の血管神経の交錯せることを指したものである。火球及び地汐よりは、地球の表面に通じぬるものあり、四方八方に相交錯したる脈絡を以て、地球の表面に通じぬるものあり

(大正一〇・二・二五 舊一・一七 櫻井重雄録)

【圖四第】

大陰の圖



イ 正面より見たる圖

ハ 背面より見たる圖

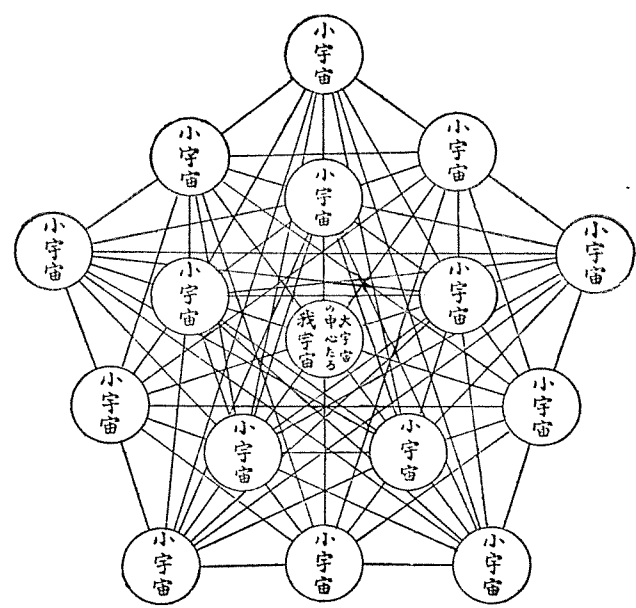
ロ 側面より見たる圖

ニ 側面より見たる圖

第四章 神示の宇宙〔其二〕(一九七)

【圖五第】

大宇宙の圖



前節に述べたるところを補ふために、更に少く断片的に説明を加へ置くが如し  
併し自分の宇宙観は凡て神示の儘であらず、現代の天文学と如何なる交渉を有するや否やは全然自分の関知するところではない

自分は神示に接してより二十四年間、殆ど全く世界の出版物その物から絶縁し居たり  
隨つて現在の天文学が如何なる程度にまで進歩發達し居るか無論知らなかりしのである  
故に自分の述べたる宇宙観に對して、直ちに現代の天文学的知識を以て臨むとも、俄に首肯し難き点が少くないであらうと思ふ

前節に引續き太陽のこゝより順次述べらるべきである

神示の宇宙(其二)

太陽は暗体であつて、太陽の色が白色を加へたる如き赤色に見ゆるのは、水が光を反射するからであらう。暗夜に赤布と白布を比較して見れば白布の方がハッキリ見ゆるものさう。

これに依りて見るも水の光を反射することが判る。しつこくしつこく

大宇宙間の各小宇宙は互に牽引してゐる。それと同じく太陽がその位置を支持するは諸星の牽引力によるものであらう。故に天主は太陽を支持する爲に先づ諸星を造つた。

(第一篇天地割判の章参照)

太陽と我が地球との距離は、小宇宙の直径五十六億七千萬里の八分の一である。大空の諸星は皆それ自体の光を放ちつゝ、太陽の高さ以上の位置を占めてゐる。太陽の光りは、決して大空に向つては放射されず、恰も懐中電燈の如く、凡て大地に向つてのみ放射される。

普通我々は太陽の昇る方角を東としてゐるが、本来宇宙それ自体より言へば、東西南北の別はない。佛説に

「本来無東西何處有南北」

とあるのも、この理に由る。今、東西南北の區別を立つれば、大地の中心たる地球が北極に當る。北とは氣垂、水火垂、呼吸垂の意である。南とは背見たるといふ意味である。

地球は前述の如く、我々の住するやうな圓球ではなかりて地平である。我々の所謂地球は、大地の中心なる極めて一小部分にて、大地は第一圖に示す如く、悉く氷山といふことは、地球に接近せる氷山が解けるのみであらう。大部分の氷山は決して解

神示の宇宙(其二)

三三五

宇宙真相

地球説の一つの證據として、人が海岸に立ちて沖へ行く舟を眺める場合に、船が段々沖へ行くに従つて、最初は船体を没し、次第に橋を没して行くといふ事實を擧げられるやうだが、それは我々の眼球が既に圓球に造られてあるが故である。望遠鏡は凹鏡であるから、人間の瞳との關係で、遠方が見るのである。故に地球説を固執する人々は先づ人間の眼球そのもの、研究より始めねばなるまい。

地球は又一種の光輝を有し、暗体ではない。宇宙全體の上に最も重大なる役目を有するのは、太陽即ち月である。太陽の恩恵によつて萬物の生成化育し行くことは誰でも知つてゐるが、蔽はれたる月の洪大無邊なる恩恵を知る者は殆ど全く無い。

宇宙の萬物は、この月の運行に、微妙にして且つ重大なる關係を有つてゐる。月は二十九日餘即ち普通の一月で、中空を一周する。但し、自轉的運行をするのではなく、單に同一の姿勢を保つて運行するに過ぎない。大空に於ける月の位置が、たとへば月の三日には甲天に、四日には乙天と順次に變つて行くのは、月が靜止してゐるのでなくして西より東に向つて運行してゐる證據である。

月が我々の眼に見ゆるのは、第一圖の上線を月が運行してゐる場合で、下線を通過してゐる時は全然我々には見えない。月が上線を運行する時は、月證命の活動であり、下線を運行する時は素證命尊の活動である。次に月を眺めて第一に起る疑問は、あの月面の模様である。昔から猿と兎が餅を搗いてゐるといはれるあの模様は、我々の所謂五大洲の影が月面に映つてゐるのである。そ

神示の宇宙(其二)

三三七

れ故、何時も同じ模様が見えてゐる。蝕けた月の半面に離げな影が見えるのは、月それ自体の影である。つまり月の半面たる火球の部分が見えてゐるからである。

月蝕の起るは、月が背後から太陽に直射された場合である。日蝕は、月が太陽と地球との中間に入つて、太陽を遮ぎつた場合である。

銀河は、太陽の光が大地の氷山に放射され、それが又大空に反射して、大空に在る無数の暗星が其の反射の光によつて我々の眼に見るのである。銀河の外縁に凸凹あるは氷山の高低に凸凹あるが爲めである。

又彗星は大虚空を運行し時に大地より眺められる。大虚空とは此の小宇宙の圏外を稱するので、青色を呈してゐる。大空の色は緑色である。併し、我々は太空中の色のみならず、青色の大虚空をも共に通して見るが故に、着色に見るのである。

此の小宇宙を外より見れば、大空は大地よりはかつと薄き紫、赤、青等各色の靈衣を以て覆はれ、大地は黄、淺黄、白等各色の厚き靈衣を以て包まれてゐる。そしてこの宇宙を全体として見る時は紫色を呈してゐる。これを顯國の御玉といふ。

わが小宇宙はこれを中心として他の諸宇宙と、夫れ々々靈線を以て蜘蛛の巣の如く四方八方に連絡し相通じてゐるのであつて、それらの宇宙にも、殆ど我々の地球上の人間や動植物と同じ様なものが生息してゐる。但此の我が小宇宙に於ける、地球以外の星には神々は坐ませども、地球上に棲息する如き生物はゐらない。この小宇宙と他の宇宙との關係を圖によりて示せば、第五圖の如くである。

大正一〇・二・二五 舊一・一七 櫻井重雄

### 第四章 神示の宇宙〔其三〕(一九八)

壬仁

地球は前席に於て、太陽は暗体であつて、其の實質は少しも光輝を有せぬと言ひ、また地球は光体であると言つた事に就き、早速疑問が續出したから、念のために茲に改めて火と水との關係を解説しておきます。されど元來の無學無識で、草深き山奥の生活を續け、且つ神界よりの壽命で、明治以後の新學問を研究する事を禁じられ、恰も里の仙人の境遇に二十四年間を費したものでありますから、今日の學界の研究が何の點まで進んで居るかに云ふ事は、私には全然見當がつかない。日進月歩の世の中に於て、二十四年間讀書界と絶縁して居たもの、口から吐き出すのですから、時世に遅れるのは誰が考へても至當の事でありませぬ。昔話にある、浦島子が龍宮から歸つて來た時の様に

世の中の學界の進歩は急速であつて、私が今日新なる天文、地文、その他の學問を見ましたならば、嘖驚異の念にからるゝで在らうと思ひます。併し私としては今日の科學の圏外に立ち、神示のまゝの實驗的物語をする迄です。

「神ながら虚空の外に身をおきて日に夜に月ぬものがたりする」現代文明の空氣に觸れた學者の耳には到底這入らないのみならず、一種の誇大妄想狂と見らるゝかも知れませぬ、然れど「神は賢きもの、強きものにはあらずして、愚なるもの、弱きものに誠をあらはし玉ふ」と言へる聖キリストの言を信じ、愚弱なる私に眞の神は、宇宙の眞理を開示されたのでは無からうかと思はれるのであります。

凡て水は白いものであつて、光の元素である。水の中心には、一つの「水」があつて、水を自由に流動させる、若しこの「水」が水の中心から脱出した時は固く凝つて氷となり、少

しも流動せぬ。故に水から<sup>レ</sup>の脱出したのを、氷と云ひ、又は、氷と云ふ。火もまたその中心に水なき時は、火は燃わぬ、且つ光る事は出来ぬ。要するに水を動かすものは火であり、火を動かすものは水である。故に、一片の水氣も含まぬ物體は、さうしても燃わぬ。

太陽もその中心に、水球より水を適度に注入して、天空に燃わて光を放射し、大地はまた、火山や水の自然の光を地中の火球より調節して、その自体の光を適度に放射して居る。

次に諸星の運行に、大變な遲速のある様に地上から見わたるのは、地上より見て星の位置に、遠近、高低の差あるより、一方には急速に運行する如く見ゆ、一方には遅く運行する様に見わたるのである。が、概して大地に近く、低き星は速く見ゆ、遠く高き星は遅く見わたる。

例へば、汽車の進行中、車窓を開いて遠近の山を眺めると、近い處にある山は、急速に汽車と反対の方向に走る如く見ゆ、遠方にある山は、依然として動かない様に見ゆ、又その反対の方向に走つても、極めて遅く見ゆると同一の理である。

前述の如く、太陰(月)は、太陽と大地の中間に、一定の軌道を探つて公行し、三角星、三ツ星、スバル星、北斗星の牽引力に由つて、中空にその位置を保つて公行して居る。月と是等の星の間には、月を中心として、恰も交感神経系統の如くに、一種の微妙なる靈線を以て、維持されてある。

太陽と、大空の諸星との關係も亦同様に太陽を中心として、交感神経系統の如くに一種微妙の靈線を以て保たれ、動、靜、解、凝、引、弛、合、分の八大神力の、適度の

神示の宇宙(其三)

三四三

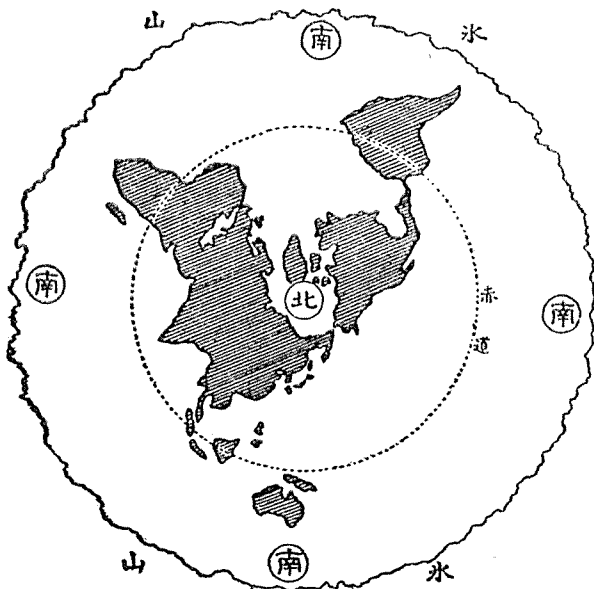
調節に由つて、同位置に安定しながら、小自動傾斜と、大動傾斜を永遠に續けて、太陽自体の呼吸作用の營で居る。

大地も亦その中心の地球をして、諸球との連絡を保ち、火水の調節によつて呼吸作用を營で居る事は、太陽と同様である。地球を中心として、地中の諸球は、交感神経系統の如く微妙なる靈線を通じて、地球の安定を保ちて居る。

また地球面を大地の北極と云ふ意味は、キタとは、前述の如く、火水垂ると云ふことであつて、第六圖の如く、(挿圖参照)太陽の水火と、大地の中心の水火と、大地上の四方の火山の水火と、大陰の水火の垂下したる中心の意味である。

人間が地球の陸地に出生して活動するのを、水火定と云ふ。故に地球は生物の安住所であり、活動總輪場である。また水火即ち靈體分離して所謂死亡するのを、身枯留、水

【圖六第】  
地球の平面圖





天上の諸星一切月球の

産み出だしたる霊体なりけり

月の面噴火口ありと学者謂ふ

星の産れし旧痕なりける

七箇一度に産出したる七星あり

三箇一度に生れし三星あり

(「庚午日記」九の卷一四九頁より)

枯定云ふのは、火水の調節の破れた時の意であります。されど靈魂上より見る時は生なく、死なく、老幼の區別なく、萬劫末代生通しであつて、靈魂即ち吾人の本守護神から見れば、單にその容器を代へるまでとあります。

(大正一〇・二二・二七 舊一・二九 加藤明子録)



火と水の二つのはしらす世に出て

これが誠の火水與とぞなる

神示の宇宙(共三)

三四五

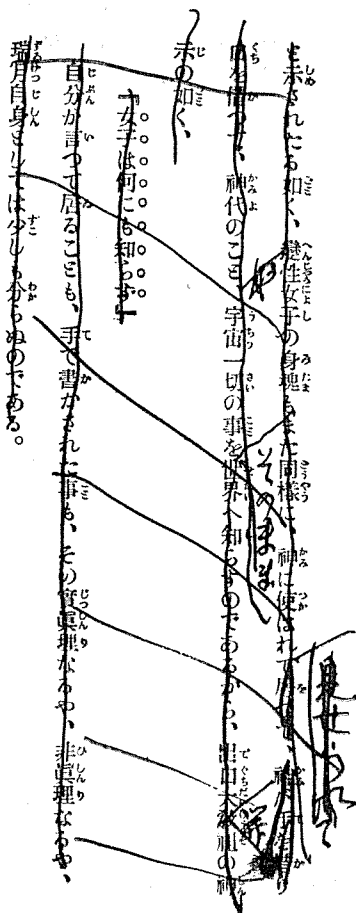
### 第四章 神示の宇宙〔其四〕(二九九)

『瑞月悲虚空、照破萬界暗』

とは神示の一端である。

瑞月は前述の如く、現代の盛んな學說に少しも拘泥せず、靈界にあつて見聞させるそのまゝを、出放題に喫舌る斗りである。是に就いては、滿天下の智者學者が邪説怪論として、攻撃の矢を向けて來るであらう。唯は、~~出川木靈廟の筆先~~に

「~~良の命神が出川直の筆先~~なるものは、昔からの因縁を書かして在るのや在るから、世界の人民が疑ふに致さぬのは、無理なきことである。神は而の手を、~~るばかり口からばかりであらかり直は何れも知る事~~」



大空に懸る無数の星辰の中には、其の光度に強弱あり、厚薄ありて、その名光一定して居ないのは、決して星の老若大小に依るのではない。その水火調節の分量及び金、銀、銅、鐵等の包含の多少の如何に由つて種々に光色が變つて見ゆるまでである。水の分量の多い時は白光を顯はし、火の分量の多い星は赤色を表はす。故に星の高低や位置に由

神示の宇宙(其四)

三四七



つて種々の光色を各自に發射して居る。星の光の如く五光射形に地球より見わたるのは火の量分の多い星であり、☆の如く六光射形に見ゆるのは水の量分の多い星である。火の字の各端に○點を附して見ると、☆の如く五つの○點となる。五は天を象り、火を象る。また水の字の各端に○點を附して見ると、水の如く六つの○點となる。六は水を象り、地を象る。故に五光射星と六光射星は天上にあつて水火の包含量の多少を顯はして居るのであります。

又星は太陽の如く、自動傾斜運動を爲さず、月球のやうに星自体が安定して光つて居るから、五光射、六光射が良く地球上から見得らるゝのである。

太陽もまた星の様に、安定し自体の傾斜運動をせなかつたら、五光射体と見れ、又は六光射体と見るのであるが、その自動的傾斜運動の激しきために、その光射体が圓く

見わたるのである。譬へば善音機(ぜんおんき)の圓盤に、色々の點や文字を書き記しておいて、これを廻して見ると、その色々の形の書畫が盛と同様に、丸くなつて見わたるやうなものである

また北斗星と云ふのは、北極星に近い星であつて、地球の中心を七劍星、又は破軍

星と稱へられてゐる。この七劍星はまた天の瓊矛とも言ひ、伊邪那岐の神、伊邪那美の神が天の浮橋に立つて漂へる泥海の地の世界を、盪古淤呂古淤呂にかき鳴らしたまひし宇宙修理固成の神器である。今日も猶我國より見る太空の中北部に位地を占めて、太古の儘日、地、月の安定を保持して居る。

また北斗星は、圓を畫いて運行しつゝ、ある如く地上より見わたるが、是は太空の傾斜運動と、大地の傾斜運動の作用によつて、北斗星が運行する如く見ゆる斗りである。万一北斗星が運行する様な事があつては、天地の大變を來すのである。併し他の星は、

地球上より見て、東天より西天に没する如くに見ゆるに拘らず、北斗星の運行軌道線の、東南西北に頭を向けて、天界を循環するが如くに見ゆるのは、その大空の中心と、大地の北中心に位して居るため、他の諸星と同じ様に見わたるのみである。譬へば、兩傘を擴げてその最高中心部に、北極星稍下つて北斗星の畫を描き、その他の傘の各所一面に、星を描いて直立しその傘の柄を握り、東南西北に傾斜運動をさせて見ると、北斗星は圓を描いて、軌道を巡る如く見え、廣い端になるほどその描いた星が、東から西へ運行するやうに見わたる。之を見ても、北斗星が北極星を中心として圓き軌道を運行するのでない事が分るであらう。

また太陽の光線の直射の中心は赤道であつたが、大地の中心は北極即ち地球である。大地の中心に向つて、大空の中心たる太陽合せ鏡の如くに位直を占めて居るとすれば

地球の中心たる北部の中津國即ち我が日本が赤道でなければならぬと云ふ人があるが、それは太陽の傾斜運動と、地球の傾斜運動の或る關係より、光線の中心が地球の中心即ち北部なる我日本に直射せないためである。

また赤道を南に距るほど、北斗星や北極星が段々低く見え、終には見わたる成つて了ふのは、大空と大地の傾斜の程度と、自分の居る地位とに關係するからである。是も兩傘を上と下と二本合して傾斜廻轉をなし乍ら考へて見ると、その原因が判然と分つて来る。

(大正一〇・二・二七 舊一一・二九 外山豊三録)

### 第五〇章 神示の宇宙〔其五〕(二〇〇)

宇宙間には、神靈原子といふものがある。又單に靈素と言つてもよい、一名火素とも言ふ。火素は萬物一切の中に包含されてあり、空中にも澤山に充實して居る。又火素といふものがあつて單に水素とも云ふ。火素水素相抱擁離一して、精氣なるもの宇宙に發生する、火素水素の最も完全に活用を始めて發生したものである。この精氣より電子が生まれ、電子は發達して宇宙間に電氣を發生し、一切の萬物活動の原動力となるのである。そして此の靈素を神界にては、高御產巢日神と云ひ、体素を神御產巢日神と云ふ。この靈體二素の神靈より、遂に今日の學者の所謂電氣が發生し、宇宙に動、靜、解、凝、引、弛、合、分の八力完成し、遂に大宇宙小宇宙が形成された。ニュートンとやらの地球引力説では、到底宇宙の眞理は判明しないでありませう。

マラチト

物質文明は日に月に發達し、神祕の鍵を以て、神界の秘門を開いた如くに感ぜられる世の中になつたと言つて、現代の人間は誇つて居るやうであるが、未だ宇宙の眞理や科學は神界の門口にも達して居ない。併し今日は、高御皇產靈(靈系)、神御皇產靈(体系)の二大原動力より發生したる電氣の應用は多少進んで來て、無線電信や、電話が活用されて來たのは、五六七の神政の魁として、尤も結構な事でありませう。併し乍ら物には一利一害の伴ふもので、善惡相混じり、美醜互に交はる造化の法則に漏れず、便利になればなる程、一方に又それに匹敵する所の不便利な事が出来るものである。電氣なるものは、前述の如く宇宙の靈素、体素より生成したものであるが、其の電氣の濫用のために、宇宙の靈妙なる精氣を費消すればするだけ、反對に邪氣を發生せしめて宇宙の

神示の宇宙(其五)

三五三

精氣を抹消し、爲に人間その他一切の生物をして軟弱ならしめ、精神的に退化せしめ、邪惡の氣宇宙に充つれば滿つる程、空氣は濁り惡病發生し害虫が増加する。されど今日の人間としては、是以上の發明はまだ出來て居ないから、五六七神世出現の過渡時代に於ては、最も有益にして必要なものとなつて居る。モ一步進んで不増不減の靈氣を以て電氣電話に代へる様になれば、宇宙に忌はしき邪氣の發生を防ぎ、至粹至純の精氣に由つて、世界は完全に治まつて來る。この域に達するにも、今日のやうな淺薄なものを捨て、神靈に目醒めねばならぬ。大本信者の中には、電氣燈を排斥する方々が、たま／＼在るやうに聞きますが、夫は餘り氣が早過ぎる。これ以上の文明利器が發明されて、昔の行燈が不用になつた様に、電燈が不用になる時機の來た時に電氣を廢すればよい。また宇宙には無限の精氣が充滿してあるから、何程電氣を費消しても無盡藏である。

決して、無くなる云ふ心配は要らぬ。また一旦電氣濫費より發生した邪氣も宇宙無限の水火の活動によつて、新陳代謝が始終行はれて居るから大丈夫である。この新陳代謝の活用こそ、神典に所謂神戶四柱の大神の不斷的活動に由るのである。人間は宇宙の縮圖であつて天地の移寫である。故に人體一切の組織と活用が判れば、宇宙の真相が明瞭になつて來る。謠に曰ふ「燈臺下暗し」と、吾人の体内にて間斷なく天の御柱なる五大父音と、國の御柱なる九大母音が聲音を發して生理作用を營る如く、宇宙にもまた無限絶大の聲音が鳴り鳴りて、鳴り餘りつゝある。而して大空は主として五大父音を發聲し、地上及び地中は主として九大母音が鳴り鳴りて、鳴り足らざる部分は天空の五大父音を以て之を補ひ、生成化育の神業を完成しつゝある。天空もまた大地の九大母音の補ひに依つて、克く安靜を保ち、光温を生成化育しつゝある。

神示の宇宙(其五)

三五五

またこの天地父母の十四大音聲の言靈力によつて、キシチニヒミイリキの火の言靈を生  
成し、またケセテネヘメエレエの水の言靈と、コソトノホモヨロの地の言靈と、クス  
ツスフムユルウの結（即ち神靈）の言靈とを生成し天地間の森羅万象を活かしめつ  
つ造化の神業が永遠無窮に行はれて居る。試みに天空の聲を聞かむとすれば、深夜心  
を鎮めて、左右の手指を左右の耳に堅く當て、見ると、慥にアオウエイの五大父音を  
歴然と聞くことが出来る。瑞月の無學者が斯なことを言つても、現代の學者は迂遠  
極まる愚論と一笑に附し去るであらうが、身体を循環する呼吸器音や、血液や、食道管  
や、腸胃の蠕動音がそれである。然るにその音聲を以て宇宙の音響と見做すなご、實に  
呆れて物が言へぬと笑はれるであらう。安くぞ知らぬ人間の体内に發生する音響そ  
のものは、宇宙の神音靈なることを。今醫家の使用する聴診器を應用して考へ見る時  
は、心臓部より上半身の体内の音響は、五大父音が主として鳴り響き、以下の内臓部の  
音響は九大母音鳴り渡り、その他の火水地結の音聲の互に交叉運動せる模様を聞くこと  
が出来来る。人軀にして是等の音聲休止する時は、生活作用の廢絶した時である。宇宙  
も亦この大音聲休止せば、宇宙は茲に潰滅して了ふ。地中の神音は人間下部の音響と  
同一である。只宇宙と人軀とは大小の區別あるを以て、其の音聲にも大小あるまでとあ  
る。大聲耳裡に入らず、故に天眼通、所謂透視を爲すに瞑目する如く、宇宙の大聲を聞  
かむとすれば、第一に閉耳するの必要がある。神典に曰ふ、「鳴り鳴りて鳴り餘れる處  
一所あり、鳴り鳴りて鳴り足らざる處一所あり」と、是れ大空及び大地の音聲活用神  
理を示されたものである。聖書に曰ふ「太初に道あり云々」と、之に依りて宇宙言靈の  
如何なる活用あるかを窺知すべきである。

(大正一〇・二・二八 舊一・三〇 松村仙造録)

さんぜんせかい、いちぎにひらくむめのはな、こんじんのよになりたぞ  
よ。さんぜんせかいが、いちぎにひらくぞよ。しゆみせんざんにこしをか  
け、あおくもがさでみみがかくれぬぞよ。(明治三十七年九月六日神諭)

## 二靈主体(卵の巻)一終

○  
神示の宇宙として、靈界物語に發表して置いたが、學者と喧嘩になる  
ので「夢か現か誠か嘘か 嘘ぢやあるまい誠ぢやなかる ほんに判ら  
ぬ物語」と書いて小説にして置いた。暇があつたら學者をやつてやろ  
うと思つて居たが暇がなかつたので、之から書くが發表はせぬ。發表  
したら學者が真似してぐじゃぐじゃにして了ふから。

(昭和十七年「新月の影」より)

○  
宇宙の内で一番よく出来てゐるのは地球丈で、各星と靈線でつないで  
ゐるのだ。太陽も月も同様だ。

(昭和十九年「新月の影」より)